

ヴァージニア・ウルフをトラウマ理論で読まない

『ダロウエイ夫人』のシエル・ショックとジェンダー

阿部幸大

ヴァージニア・ウルフ『ダロウエイ夫人』（一九二五）の終盤、ロンドンの自宅でパーティを開いている主人公のクラリッサ・ダロウエイは、若い男が自殺したという知らせを受けとる。自殺者はセプティマス・ウォレン・スミスという第一次世界大戦の帰還兵で、クラリッサはこの自殺者には従軍経験があるらしいという情報しか知らないのだが、読者はこの時点で、セプティマスが戦争神経症に悩まされており、戦後の日常生活になかなか復帰することができずに苦しんだあげく自殺に追い込まれた詳しい経緯を読み終えたあとである。このニュースを耳にする直前にクラリッサは、夫のリチャードと医師のウイリアム・ブラドショ어가「シエル・ショックの後遺症」と「法案」について話しているのを立ち聞きしている「1」。『ダロウエイ夫人』のウルフは帰還兵の自殺とシエル・ショックを直接的に結びつけているわけで、すでに一九八七年にはこの小説を「一九二二年八月に英国議会に提出された『シエル・ショックに関する戦争省調査委員会レポート』」に対する「ウルフの」怒れる応答」として読む解釈が提出されている「2」。臨床的にも日常的にもシエル・ショックはすでに死語であり、戦争神経症の呼称はトラウマならびにPTSDが取っ

におけるシエル・ショックと医療文化」（二〇一七）などが出版されてきたが、これらの研究が提示するのは、「シエル・ショックはPTSDではない」³という認識である。「砲弾衝撃」と直訳できるシエル・ショックはもともと、戦場における砲弾の震動が兵士の脳に何らかの損傷を引き起こすことで発生する不全であるという推測のもと考案された名称であった「4」。それから同概念は精神の不調として研究が進められたものの、トラウマやPTSDの理論的フレームワークが神経症に苦しむ帰還兵を即座に被害者として認定できるのに対して（いまわれわれはこの文化圏にいる）、当時できたての未発達な臨床的ツールにすぎなかったシエル・ショックは、帰還兵がどのように、なぜ苦しんでいるのか、ほとんど解明するにはいたらなかった。一九二二年の「レポート」が示すように、この心の病は、自己制御と規律意識の欠如として理解されていたのである「5」。それはきわめて攻撃的な病理学で、最悪の場合、シエル・ショックと診断された兵士や帰還兵は「臆病」という理由で処刑された「6」。この小説がウルフの「怒れる応答」であるという先に引用した評価は、こうした当時の社会的・文化的・医学的背景にてらして、はじめて理解可能となる。「レポート」はシエル・ショックの具体的な治療・解決ではなく、医者たちによる生権力の行使を法的に認可するための文章であったのであり、小説はブラドショアとホームズという二人の医師を、セプティマスを死に至らしめる医学政治的な暴力の実践者として、明確に批判的に描いている。

この一九二五年に書かれた小説にトラウマ理論を適用する読解

て代わって久しい「3」。トラウマ理論が流行したのは一九九〇年代で、当時からの洗練された戦争神経症の理論によってウルフの第一次大戦小説を読みなおす試みが続けられてきた。とりわけ一九九八年のカレン・デイミンスター「ヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ夫人』におけるトラウマと回復」⁴が大きな影響力を持ってからというもの、トラウマ理論による同作の読解は、この小説とウルフにとどまらず、戦争神経症とそのフィクションにおける表象一般についての理解に多大な貢献をもたらしてきた。

しかし、トラウマ理論は第二次世界大戦、とりわけホロコーストを論じるべく構築された言説体系であるのに対して、シエル・ショックは第一次大戦の前後に整備された臨床概念であり、これらは区別する必要がある。シエル・ショック概念の歴史化の試みは、トラウマ理論の興隆のあと、十年ほど遅れて始まった。同トピックに特化した最初のモノグラフであるピーター・リース『シエル・ショック——トラウマ的神経症と第一次世界大戦の英国兵』（二〇〇〇）を皮切りに、フィオナ・レイド『ブローケン・メン——一九一四—一三〇の英国におけるシエル・ショック、治療、回復』（二〇一〇）、トレイシー・ラフラン『第一次世界大戦の英国

は、セプティマスと彼の病状の誤読にとどまらない帰結をもたらしてきた。それは主人公のクラリッサが上述の医者たちと同様、セプティマスに敵対する人物であるという不当な意見を形成してきたのである。クラリッサは社会において抑圧的階級の一員であり（この観察したいは誤りではない）それゆえセプティマスの加害者のひとりであるとデイミンスターが断じて以来、以下で見られるように、トラウマ理論に精通した批評家たちの多くが、クラリッサは上流階級が行使する社会的暴力の権化であると論じてきた。この見取り図においてクラリッサは戦争の部外者であり、真正の当事者たるセプティマスの苦悩を理解する能力もなければ資格もない、ということになる。ここで重要なのは、シエル・ショックが強力にジェンダー化された概念であったという事実である。その症状がヒステリー——これもまた一九世紀後半に発明された未発達でソジニスティックな概念だった——のそれに酷似していることは当時から指摘されていたが、大英帝国とその軍事力のマスキュリンなイメージを損なうという理由で、その類似性は意図的に蔑ろにされた。階級とジェンダーを根拠にクラリッサを戦争の被害者から除外し非難するとき、批評家たちは意図せずして、戦後のロンドンをいまだ強く支配していたヴィクトリア時代の家父長イデオロギーと結託しているのだ。トラウマ理論はセプティマスに対する好意とひきかえに、クラリッサに対する不必要な敵意をも生んでしまった。本稿は近年の研究の検討と小説の精読をつうじて、トラウマ理論がいかにクラリッサの被害性を軽視してきたかを辿る。ウルフをトラウマ理論で読まない——この作業を介して本稿

は、いまやほとんど俗説化して流通しているトラウマ理論の濫用に警鐘を鳴らすものである。シェル・ショックとトラウマは、あらためて歴史化されなくてはならない。

とはいえ、自殺の知らせを受け取ったときのクラリッサのふるまいが問題含みであるように見えることもまたたしかである。彼女はまず自身のパーティで死が話題にあげられたという事態に対する憤りを表明し、つづいてモダニズム文学研究で「エビファニー」と通称される、セプティマスが自らの命を絶つた場面を幻視するというリアリズムでは説明不可能な霊的体験を経たのち、次の感慨を漏らす——「自分は彼に似ている気がする……」自殺してくれてよかった「……」彼のおかげで美を感じられる、喜びを感じられる（二八六）。ここで彼女は自殺した帰還兵と安直に同一化し、またその死を美化することで彼の苦痛を矮小化しているように見える。第一に、本稿はジェンダーに焦点をあてつつシェル・ショックを歴史化することで、クラリッサのこうした発言には歴史的・社会的な根拠があることを示し、どのような意味で「セプティマスとクラリッサはもつとも深いレベルにおいて同類」^[9]であるのかを詳しく論じる。この男女はそれぞれ精神の不調に悩まされているだけでなく、シェル・ショックとヒステリーという、当時まだ未解明であったところか抑圧の道具として利用されていたジェンダー・イデオロギーの被害者であった。第二に、本稿はクラリッサとセプティマスが作中いちども出会うことがないという素朴な事実に着目し、その理由を問う。作者自身も述べていることだが、『時』と名付けられた本作の草稿におい

ては、クラリッサが自殺するはずだった。ウルフはセプティマスというキャラクターをあとから導入して、いわばクラリッサのかわりに自殺させたのである^[10]。ロンドンにおける彼らの生活圏は重複しているため、小説執筆の技巧上、この二人を出会わせることは容易だったはずであり、ウルフはあえてそうしなかったのだと考えられる。本稿はこの形式上の選択を当時の社会構造の反映として、すなわち女性のヒステリーと男性のシェル・ショックとの連帯の可能性を分断するメデイコポリテイカルな暴力に支配されていた当時の社会構造の反映として読む。ここでは家長イデオロギーが「女」と「弱い男」の邂逅を阻んでいるのだ。『ダロウエイ夫人』という小説があえてエビファニーに訴えたのは、二人を隔絶する社会的・文化的なバリアを超えるには、現実からリアリズムから離反するほかないのだ、ということを描くためにほかならない。モダニズム文学の技法であるエビファニーはウルフにあって、フェミニニストとして社会の因習に反逆するための文学的な武器なのである。

一 ト라우マからシェル・ショックへ

一九七〇年代から八〇年代にかけてのウルフ研究は、キャロリン・ハイルブラン、ジェーン・マーカス、エレヌ・シヨウォルト、ナオミ・ブラックといった批評家たちがフェミニニスト・ウルフを再構築していた時期だった。デイミースター論文が大きなインパクトを發揮したのはこうした背景においてであり、その根拠を奪うのである^[11]。この読解はあたかもクラリッサがセプティマスを自殺に追い込んだ張本人であるか、あるいはクラリッサも死ぬべきだと主張しているかのようだ。デイミースターは当時のウルフ批評における偏向をたすという目的を、セプティマスの被害性とクラリッサの加害性の両方を打ち立てることによって達成したのである。

子になったのがトラウマ理論であった。「モダニストの文学はトラウマの文学である」という認識から論文は始まる。「一九二〇年代においてその文学は、以後五〇年間にわたって精神科医も理解することのなかった心理状態に形を与え、表象していたのである」。ウルフの鋭い観察眼はトラウマタイズされた精神のメカニズムをそれが理論化される半世紀前から知悉していたのであり、われわれは最新の理論で武装したいま、ようやくこの小説を十全に理解することができる——というわけだ。誤読されてきたキャラクターとはもちろん、トラウマに苦しむセプティマスである。「彼の悲劇を十分に理解するには、トラウマが精神に与える影響と回復のプロセスとを理解せねばならない」。そしてトラウマ理論を介してわれわれが『ダロウエイ夫人』から学ぶべきは、「モダニズムの形式はトラウマタイズされた心を描くのに最適であるが、回復を描くには不向き」であるということであり、それを示すのが「セプティマスを診る医者たちとクラリッサによって代表される社会というものが……」この帰還兵を黙らせ排斥することで彼の回復を阻害し、それが自殺というコミュニケーション^[12]（作中の語彙のための命がけの（しかし無駄に終わる）最後の手段に帰結する）というプロットである。かくしてデイミースターの結論はクラリッサに対する明確に否定的な評価となる——トラウマに苦しむ自殺せねばならなかった悲劇の帰還兵に対して、この上流階級のレディは「生き続けることを選び、現状の維持に邁進する」すなわち、「クラリッサはセプティマスを沈黙させ、彼のメッセージに応えることを拒み、変化を拒否することで彼の死から

意を奪うのである^[11]。この読解はあたかもクラリッサがセプティマスを自殺に追い込んだ張本人であるか、あるいはクラリッサも死ぬべきだと主張しているかのようだ。デイミースターは当時のウルフ批評における偏向をたすという目的を、セプティマスの被害性とクラリッサの加害性の両方を打ち立てることによって達成したのである。

デイミースターに代表される同作のトラウマ読解は、より広範な影響力をもった理論家の仕事に内在する問題の一部でもある。ドミニク・ラカブラが総括しているように、理論家たちはトラウマ概念をカントやリオターの崇高やラカンの現実界といった諸概念と接続し、それが表象不可能で、超越的で、神聖な核であると論じてきた^[12]。この傾向が顕著に見られるのは、もつとも広く読まれたトラウマ理論である九〇年代のキャシー・カールの仕事と、シヨシヤナ・フェルマンとドリ・ロープの共著である「証言」^[13]（一九九二）においてである。彼らはともにトラウマ概念を哲学化しただけでなく、それを強く倫理化した。「トラウマは無意識の症候ではなく、歴史の症候なのだ」^[13]という定式で知られているカールによれば、ポスト構造主義が歴史の直接参照性を否定して以来、「歴史はその起源のアクセス不可能性においてのみ把握可能となった」。したがってトラウマは歴史への唯一の回路であり——あるいは歴史はトラウマ的な症候としてのみ顕現しうるのであり——トラウマは「真理の問題と密接に絡みあい」、「まさしく不可能性に耳をかたむけ、それを目撃するための新しい方法論を開くとともに、われわれに叩きつけるのであ

る「14」。彼女の見取り図においてトラウマ的主体は、歴史的眞実、あるいは眞実としての歴史にアクセス可能な唯一の場所を占めている。フェルマンとローブの共著はホロコースト研究だが、彼らもまた「第二次世界大戦の歴史的トラウマ」以後、トラウマ的歴史の目撃は不可能になったと主張した。ホロコーストが「われわれの時代における分水嶺」を打ち立てて「あらゆる知のモードが阻害された」現在、もはやトラウマ的な記憶と歴史の現実にアクセスしうるのは文学と芸術のみである「15」。一九九〇年代のトラウマ理論は、トラウマ、トラウマティックな出来事、あるいはトラウマタイズされた主体を介してのみわれわれは歴史Ⅱ現実Ⅱ眞実の間接的な目撃を許されている、というパラダイムを打ち立てた。

トラウマ理論は戦争神経症一般についての理解を大きく進めたが、シエル・ショックをふくむ第一次大戦にかかわる事象の分析にそれを適用する解釈は、『ダロウエイ夫人』のような小説に埋め込まれた歴史意識を捨象する結果をもたらしてきた。デイミースターの議論に典型的に見られるように、トラウマ理論の倫理的側面を押し出すタイプの批評家は、トラウマタイズされた当事者とそうでない部外者を比較し、前者を物語における唯一の被害者として認定するきらいがある。このパラダイムで『ダロウエイ夫人』を読むとき、セプティマスのみがアクセス可能であるはずの歴史Ⅱ現実Ⅱ眞実にクラリッサが触れることは、不可能だけでなく、非倫理的で暴力的でさえあるということになる。デイミースター以後の批評家たちは、セプティマスと「コミュニケーション」

む」べく彼らの「気質の調査」を行うよう推奨されたし、『タイムズ』紙の匿名のコメントは「危険を顧みず勇敢に行動できるような訓練することは可能なのだ。それこそ規律というものが目指す望ましい成果なのである」と主張した「21」。さらに『レポート』は、多くの兵士がシエル・ショックを偽装しているか、または症状を誇張している可能性があるという問題を論じる文脈で、「じつさい、私は臆病さと「シエル・ショック」を区別できる気がしない」という現場の意見を引用したうえで、「治療」のセクシオンでは、兵士がシエル・ショックと診断された場合、上官と医師は本人にそのことを通知しないよう勧告している。「怖気づいたりメンタル・コントロールができなくなるることによって名誉ある復員への道が開かれるなどと兵士に思わせてはいけない」²²。シエル・ショックの誤用を正すという建前で執筆された『レポート』は結局のところシエル・ショックを大英帝国軍の効率化の問題へと回収し、病める帰還兵たちに対する誤解と敵意とをよりいっそう煽る結果となったのである。

トラウマ理論はクラリッサの被害性の過小評価ばかりでなく、セプティマスの被害性の過大評価もたらした。セプティマスが戦争の被害者であるということは現代の読者にとって一目瞭然だが、第一次大戦直後の社会において戦争神経症の精神的ダメージやそのメカニズムなどは一般に浸透していなかった。『タイムズ』紙にコメントを寄せている「医療関係筋」によれば、シエル・ショックの病因のうち明確なものひとつは「家系的な障害（つまり遺伝）であり、『レポート』は症状の「感染」を引き起こす「毒

する資格をクラリッサから剝奪する根拠として、彼女の階級とジェンダーを挙げた。先述したエビファニーの場面の解釈において、ある研究者は「彼女のジェンダーと階級の特権が目撃能力を制限している」¹⁶と難じ、また別の著者は「この女性の目撃者の仕事を日常に戻ることであり「……」それはトラウマ的な出来事の忘却を伴う」¹⁷と論じている。かくしてトラウマ読解はしばしばミソジニーに接近することになる。ウルフが「芸術理論についてのポスト・ホロコースト的なヴィジョン」¹⁸を持つていたと褒め称えるアナクロニズムは、ウルフがこの小説をぶつけた一九二〇年代の文化的、社会的、歴史的な条件を見落としてしまうのだ。

一九二二年の八月に『シエル・ショック』に関する戦争省調査委員会レポート』が国会に提出されたのち、同年の八月と九月に『タイムズ』紙がその抜粋を掲載している。同紙の定期購読者であったウルフは小説中にもこれを繰り返し登場させており、さらに彼女がセプティマスというキャラクターを思いついたのは同年の十月であるため、この抜粋を読んだ可能性は非常に高い¹⁹。『レポート』はシエル・ショックを予防し治療する手段として「規律」を重視しているが、そこでシエル・ショックは士気、勇氣、自制心といった個人の資質の問題として理解され、いわば兵士を鍛えることで解決可能だと考えられている。「訓練期間中は、兵士が自分の安全よりも部隊の福利を優先できる標準的な士気を十分に身につけられるよう延長すべきである」²⁰。また上官は指揮下にある各兵士に「男の統御力 (Man-Mastership)」を教え込

物」を同定していない点で不十分だとする²³。戦争神経症というものは時代にかかわらず発生してきた現象ではあるのだが、その数が急増しパブリックな空間において広く可視化されたのは第一次大戦以後だった。歴史家たちはその原因を戦争の工業化・機械化に求めており、シエル・ショックの症例が急増した最初の戦闘としてマヌルの戦い（一九一四）とソナムの戦い（一九一六）を挙げている²⁴。人間の想像力の範疇を超えた崇高なエネルギーを炸裂させる機械は戦争のスケールだけではなく、人々の日常生活における活動内容をも一変させ、じつさい当時は「トラウマ的神経症」と呼ばれる症状を引き起こすおもな原因として鉄道事故が知られていた。だがシエル・ショックについての医学的・政治的な議論が公的に交わされるようになったのは一九一八年の休戦のあと、とりわけ一九二〇年から二二年のあいだで、それはシエル・ショックの症状が日常生活の場において目立つようになるのが戦後のことだったためである。セプティマスとクラリッサはこうした社会的状況下に生きているのだ。

戦後の英国はシエル・ショックの深刻さを十分に理解しなかったばかりか、明確な目的意識をもつてその意味合いをコントロールし矮小化した。シエル・ショックがジェンダー化されたのは、それが男性の帰還兵に見られる症状だったことに加えて、その女性版ともいべきヒステリーという先行概念が存在し、それとの関連において研究されたためである。一九世紀後半にジャン・マルタン・シャルコーなどによって理論化されたヒステリーとシエル・ショックとの類似はあきらかで、一九二〇年のウイリ

二 セプティマスとシエル・ショック

二人の医師によるセプティマスの迫害は明確に批判的に描かれている。ひとりにはウィリアム・ブラドショーで、その「診断はほとんど無謬」であるという彼の人物造形は「フランスと英国で三千以上のシエル・ショックの症例を診た」^[28]というさきに触れた実在の医者ウィリアム・ブラウンを想起させる。もうひとりにはホームズで、こちらはブラドショーの評言によれば「有象無象」^[一九七]の医者である。彼らの医師としての能力には雲泥の差があるものの、それぞれの方法でセプティマスに医学的暴力をふるう点においては同断である。まずホームズについて、彼は戦争神経症というものをまったく理解しておらずセプティマスを完全に誤診するように見えるのだが、「健康はおおむね自己コントロールの問題」^[一九二]だと論ず彼はじつのところ『レポート』の忠実な実践者である。「医者と患者の関係」というセクションで『レポート』は、医師には「状況を支配する十分な力 (edge) が求められる」としたうえで、次のようにつづける――

医師は患者から完全に信頼されなくてはならない。中途半端な処置は言語道断であり、患者が医者 of 意見に逆らう可能性は皆無でなくてはならない。症状が長引くとそれは患者において個人と社会の鋭い葛藤としてあらわれる場合が多いので、
 医者は社会の側に立ち力づくで押し切る (throw his weight into the scale) ことができるよう、患者と医者 of あいだに逃避の

「英雄」――『ダロウエイ夫人』は彼らの銅像で溢れている――との対比において「女々しい」戦士というレッテルを貼られ、彼らの病める身体は、大英帝国の無敵で勇敢で男性的なイメージを脅かす存在となった。一九二〇年代において被害者セプティマスを共感的に描くというウルフの選択はしたがって、同時代の社会にたいするタイムリーかつクリティカルな「怒れる」応答だったのだ。この社会的背景に位置づけられないかぎり、ウルフが『ダロウエイ夫人』に託したラディカルさを読み解くことはできない。

余地がまったくないようにせねばならない^[29]。

「恰幅のいい」^[一九一]ホームズは“throw his weight”するごとくで患者を「支配」するのにつけての医師である(セプティマスは「ホームズがほくらにのしかかってくる」と感じる^[二四〇])。じつさい彼はセプティマスの病状を患者における「個人と社会」のバランスの問題だとみなしており、セプティマスの症状はイタリア人の妻にたいする夫としての責任の放棄を意味する――「英国人の夫というものについて妙なイメージを彼女に植えつけるんじゃないかね? 夫には妻に対する義務というものがあろうかと思いがね? ベッドで寝てばかりいないで何かしたほうがいいんじゃないかね?」^(一九二)。この医者にとって、セプティマスは自身の精神ならびに外国人の妻を十分にケアできるだけの「強さ」がないという理由で英国人の男として不適格なのだ。シエル・ショックの兵士がしばしば持ち場を放棄したせいもあり、英国軍はシエル・ショックを臆病さの兆しとみなし、休戦のあとでさえ彼らの処刑を実行していたが^[30]、ホームズが「臆病者!」と叫んで家に押し入ることでセプティマスを自殺に追いやることは偶然ではない^(二四九)。彼は医学的暴力の、もともと家父長的かつマスキュリンな体现者である。

このイデオロギーはセプティマスの妻ルクレツィアも共有している。医者が「病気ではない」と保証しているのに病人のようにふるまうセプティマスは、彼女にとって「自分勝手」としか映らない^(二三)。自分は男らしい戦士と結婚したはずなのに、この弱

りきった夫は何もせず、異常な言動をくりかえし、しょっちゅう涙さえ流している――「セプティマスのような戦争で戦った男、勇敢な男が、泣くのがいちばん我慢できない」^(二四一)。ここでもやはりシエル・ショックの症状は臆病さの証として解釈されており、だからこそルクレツィアは、彼の症状――彼女の言葉では「不全」――を公衆の視線から「隠さ」ねばならないと考えるし、自分の夫が「弱い」という事実は母親に打ち明けられない恥辱であると信じている^(二六)。夫の自殺願望について「自殺するという男なんて臆病だけど、セプティマスは戦争に行ったんだから勇敢なはず。いま彼はセプティマスじゃないんだ」^(二三三)と考える彼女の思考回路は、マッチョなミリタリズムに染まっている。彼女にとって市民の社会的・家庭的な責任は、軍人の戦場における戦闘能力と地続きなのだ。戦士⇨家父長というものの社会的定義の条件を満たさないかぎり、その人物は男としてカテゴライズされないのである。むしろルクレツィアもこうした歴史的背景のひとりの犠牲者であるには違いないわけだが、夫を自分勝手に臆病で無責任だとしか捉えられない彼女のイデオロギーがセプティマスの被害性を軽減することはない。

ホームズとは対照的に、ブラドショーがセプティマスに行使する医学的権力は精妙で洗練されている。無謬という評判にふさわしく、彼はセプティマスをひとめ見た瞬間にその重症ぶりを見抜く。「これは完全に衰弱だ――肉体的にも精神的にも完全に衰弱している。どの症状もだいたい進行している」^(九五)。上流階級むけのクラリッサのパーティーでもつねに「サー」という敬

称つきで呼ばれる彼は高い社会的地位を占める有能な医者であり、シエル・シヨックの『レポート』作成になんらかの形で関わることになるだろう存在だ。だから彼が患者にいつも命令口調で——彼の頻用する *must* という助動詞はセプティマスを憤慨させる（一四七）——話すのも理解できる。「彼「セプティマス」は自殺すると脅したんでしよう。選択の余地はありません。これは法律の問題なのです」（九六—九七）、と彼はルクレティアに断言する。セプティマスが診療所に隔離されることは法的に決定されるのであり、彼はその医学分野における番人なのだ。これが彼の「状況を支配する力」の發揮方法である。さらに悪名高いのは彼の健康観で、彼は健康の根本原理を「均衡」であると規定する——

均衡を崇拜するサー・ウィリアムは自分自身ばかりでなく英国を繁栄させているのだ、狂人を、隔離し、出産を禁止、絶望を罰し、不適格者がみずからの考えを喧伝できないようにし、その狂人が男なら医師自身の、女ならブラッドショー夫人の、均衡の感覚を共有させるのである（夫人は刺繍をし、編み物をし、週に四日は家で息子と一緒に夜を過ごす）。（九九）

これはいま生政治として知られる、ひとびとを適切な様態で生きるよう強制するタイプの権力である。ミシェル・フーコーが定義したところによれば、「生政治は、出生率・死亡率・各種の生物学的な障害・環境要因などを介してその権力の及ぶ範囲を規定する」。それは「生きることを強制」する「規律的権力」であ

括弧に入れない

た」というが、彼の精神を硬化させたのは戦争の衝撃だけでなく戦場を支配するマイズモであり、それは彼に（喪の）感情を禁じることで戦後生活における回復をも妨げているのだ。彼は第一にマッチョな戦争によって、第二にマッチョな社会によってトラウマタイズされる。死んだエヴァンズが眠る神聖な世界にも、家長的な法が支配する現実世界にも属することができない彼は、煉獄における永遠の苦しみを運命づけられているのである（ルクレティアは彼がダントの『地獄編』を読むのを妨げる「八八」）。彼はこの「狂人」の視線で、「均衡」といった人道的に見えなくもない教条の持つ暴力的な側面を暴くのだ。フィオナ・レイドが論じているように、「ヴィクトリア朝的な「不屈の精神」(stiff upper lip)を最初に破壊しはじめたのはシエル・シヨックを患う兵士たちであり、またしばしば拙速な軍法会議と無許可で執行される死刑という代償を支払いながら、この血みどろの戦争を戦うことを最初に拒否したのも、やはり彼らだった」³³。生政治のメデイコポリテイカルな暴力は、まさしくセプティマスを「臆病」という理由で「処刑」するのである。セプティマスは窓から身を投げるとき、「(I'll give it to you!)」(「I'll give it to you!」) (一四九) というダイイング・メッセージを遺す。このホームズに向けているように思えるメッセージはしかし、魔術的な回路をたどって、クラリッサという部外者に——セプティマスの言葉を借りれば——「伝達」されることになる。

り、生権力は重要な装置のひとつとして医学を發展させ、「各医療施設をつうじて治療法を整備し、情報を集権化し、知識を標準化」した³¹。ブラッドショーの場合、彼が医療をつうじて定着させるどころの「標準化」された知とは、ヴィクトリア朝的な家長制と英国の帝国主義的イデオロギーそのものだ。あからさまに攻撃的になるまうホームズとは異なり、彼はシエル・シヨック患者という逸脱的な分子は処刑するのではなく社会へと再馴致することが自身のプロフェッショナルな国家的責務であるとよく理解し、それを実行しているのである。ラフランによれば戦後じつさい、「医者たちは「シエル・シヨック」を患う男たちを柔弱だとか女々しいなどとあからさまには描写しなかった」という。医学界は弱った兵士という存在が英国のイメージを脅かす存在であると認識していたので、「その脅威を抑えこむべく、とりわけ彼は「文明化された」英国的な男らしさと、その特質の核となる意志力というものの維持に引きつづきコミットした」³²。このような歴史を踏まえると、トラウマに苦しむ戦争帰還兵は被害者であるという第二次大戦後に醸成された常識をそのままこの小説に適用することのアナクロニズムがいつそう明確になる。

こうした文脈で読むとき、いつけん狂気じみたセプティマスの誇大妄想的な発言——「社会を刷新するべくして降臨した³¹」たる自分が「世界を変える」ために「至高の秘密を内閣に知らしめねばならない」(二四—二五、六七)——もまた現実的な含意を帯びはじめる。彼には戦場で「男らしさが芽生え」、戦友のエヴァンズの死に直面したときも「ほとんどなにも感じない自分を褒め

三 クラリッサとシエル・シヨック

上述の議論にクラリッサを位置づけるには、彼女自身の被害性に着目する必要がある。それは彼女の個人的な過去だけでなく、やはり大戦に由来するものだ。小説の冒頭で読者は終戦を言祝ぐ多幸的なクラリッサに出くわすのであるが、そのセンチンス内にはミセス・フォクスクロフトとレイディ・ベクスボロという息子を亡くした二人の女性の悲嘆が織り込まれている。彼女たちにとって戦争は終わってなどいないのだが、それはまさしく彼女たちが戦争で死ななかつた（死ねなかつた）がためにそうなのである。かくしてこの小説は、多くの女性が背負う運命にあった戦争の間接的な被害性に光を当てることで開幕する。このテーマを精査した白井雅美の論文「『ダロウエイ夫人』における戦争の女性被害者」は、「セプティマスとクラリッサを結びつける絆は、戦争と家長的な価値体系から受ける被害という共通の感覚である」と論じている³⁴。だが白井の論は女性の被害性が焦点となっており、彼女のいう「絆」を捉えきれていない。すでに引用したように、ズワードリングもやはり彼らは「もつとも深いレベルにおいて同類」なのだと書いていたが、では正確にどのレベルにおいてクラリッサとセプティマスは同類であるのか、あるいはより浅いレベルにおいてはなぜ同類であると見做されず、結果として「自分は彼にすぐ似ている気がする」という認識が批判対象となってしまうのか。ふたりの「絆」をよりクリアに捉えるには、ふたたびシエル・シヨックとジェンダーが鍵となるだろう。

まず、クラリッサが戦争の部外者であるという前提を疑いたい。メアリー・カルドーが『古い戦争と新しい戦争』で論じているように、第一次大戦は最初の「全面戦争」であり、それは「軍人と民間人の、戦闘員と非戦闘員のあいだの」区別を浸食した³⁵。もはや世界大戦においては当事者と部外者のあいだに明確な境界など引けなかったのである。じつさい『ダロウェイ夫人』はいかに戦争のインパクトが軍人・民間人を問わず残存しているかをつぶさに描くテキストで³⁶、冒頭部分は戦後ロンドンの風景を擬似的な戦場として描いている。たとえば商品の宣伝に飛行機が使われるが、これは戦車と並んで第一次大戦において導入された新兵器であり、戦争の大規模化・機械化の代表であるばかりでなく、まさしく前線という概念を破壊した殺戮マシンであり、その大衆的・商業的な転用である。あるいはクラリッサが街中で「暴力的な爆発音」を聞いて飛び上がる場面。これは車のクラクションなのだが、クラリッサは「わあ！ピストルを撃ってる！」と咄嗟に考えており、彼女のような階級の婦人がロンドンの街中で耳にする音を発砲音だと瞬間的に解釈するという事実は、彼女が戦時中にそのような音を聞いて怯えていた可能性を示唆している（別のキャラクターの「まったく自動車は」という落ち着いた反応と対比されたい）。さらに、この「女王が皇太子か総理大臣」を乗せているらしい車は大英帝国の権力の象徴であり、音に気を取られた通行人たちは「戦没者、国旗、帝国」に思いを馳せる。この神秘に包まれた車体からは「不滅の存在がもつ淡い光」が放たれ、それが「頑強な肉体をもつ長身の男たち」に降り注ぐと、「彼らは背筋を伸ばし、

に恵まれ」た妹の急死はクラリッサにつきまといつづける。さきの「ピストル」のほか、タクシーを見ながら彼女が襲われる「一日を生きるのだって、とても、とても危険なことなのだ」という「恒常的な感覚」や（八）、多幸的に生を言祝いだかと思えば抑鬱的に死について沈思しはじめるといった極端な気分揺れは、彼女の経験してきたトラウマティックな過去に部分的には由来している。彼女は妹を見舞ったような事故がいつでも自分やほかの誰かに降りかかりうるのだという死の可能性をつねに意識しているのだ（当時もつともよく知られていた神経症の原因が列車事故であったことを思い出そう）。彼女はまさしく当時「女性ヒステリー」の典型的な症状として知られていた神経過敏に悩まされている人物として造形されている。

すでに述べたように、当時の医者たちは男性のシエル・シヨックと女性のヒステリーの類似に気づいていたものの、英国の軍事力のイメージを損ないかねないという懸念からその事実を隠蔽したのだった。セプティマスは田舎に隔離されねばならないというブラドショーの「命令」は「レポート」の勧告に従っているだけでなく——それはシエル・シヨックの兵士を本国に戻すなどさえ書いてある⁴⁰——、「シエル・シヨック」と女性神経症の分離は戦後までつづいた⁴¹という歴史的事実が示唆しているように、彼の隔離の厳命は、よるべき夫婦の結婚生活だけでなく、セプティマスとクラリッサの邂逅の可能性をも阻害しているのだ。くわえて、当時の医学はシエル・シヨックを男性の病であると定義していたのだが、「女性はその悲嘆、恐怖、危険にさらされた

いつでも国王にかしずき、先祖代々そうしてきたように、必要とあらば大砲のまえに身を投げだす準備を整える」（二三一八）。この「戦後」ロンドンにおいて、大英帝国の臣民たちの知覚はいまだ神経レベルで戦争の論理に統御されている。

この場面は、サラ・コールが書いているように、「この小説における直近のトラウマのモード、すなわち飛行機を潜在的な兵器として認識する集団的シエル・シヨックのようなものと一致している」³⁷。ジェシカ・バーマンはさらに進んで「セプティマスのシエル・シヨックはみんなのシエル・シヨックなのだ」と論じており³⁸、むしろこれは過剰な一般化ではあるものの、たしかにわれわれはクラリッサの（シエル・シヨックではないが）当時であれば「ヒステリー」と診断されたであろう神経症を見なくてはならない。読者は彼女の戦争経験についてほとんど知らされないが、旧友のピーター・ウォルシュが明かすところによれば、クラリッサは幼少期に妹のシルヴィアの死を目撃している——「あの恐ろしい出来事。自分の妹が倒木に潰されて死ぬのを……」目の当たりにするなんて（七八）。ウルフがこのトラウマティックな過去をテキストに書き込んだという事実は、女性民間人がかかえる神経症と男性戦闘員がかかえるシエル・シヨックを接続しようというウルフの意図をさぐる足がかりになる³⁹。ピーターによれば、「家族でもつとも才能に恵まれていると口癖のように言っていたシルヴィアが年頃で死んでしまったことで、クラリッサは暗くなってしまった」という。エヴァンスの亡霊がセプティマスの心中にサバイバー・ギルトを喚起するのと同様、「もつとも才能

経験などにもかかわらず、苦難を共有するコミュニティへの参加を許されなかった」⁴²。つまりそれは女性と戦争（経験）とを言説的に切断する社会的機能を果たしていたのであって、病理の門番たる医師たちは、男性兵士のシエル・シヨックとヒステリー女性の神経症とのまさしく「絆」を断ち切る責任を担っていたのだ。かくしてクラリッサとセプティマスが作中いちども出逢わないというテクスチュアルな事実を歴史的に解釈することが可能となる——彼らの邂逅は家父長的な法によって固く禁じられているのだ。なるほどクラリッサはこの生権力の論理が支配する社会からの疎外という点において「彼に似ている」のである。そしてこの現実に一撃を与えるために、小説はエピファニーという法外な力技に訴えるのだ。

四 フェミニスト・エピファニー

トラウマ読解をふくめ、エピファニーの場面を好意的に解釈しようとする批評はいくつもある。たとえばクレアム・ルイスは、この小説はセプティマスとクラリッサの「コミュニケート」の可能性を想像⁴³はするのだが最終的にその「救済」の「希望を捨て去る」としたうえで、しかしながらこの結末は「慰安と終結を宙吊りにする」ことにより、「別の選択肢が必要なのだ」ということ、「もつと誠実ななかがありえるのではないか」という可能性を暗示するのだと論じている⁴³。同様にケイリー・ジョイスのトラウマ読解は、「トラウマが治癒せずクラリッサが目撃に

失敗するということで、ウルフのモダニストとしての真正さが完成をみる」と述べる⁴⁴。このタイプの読解は共通したロジックを用いている。すなわち、クラリッサはセプティマスの被害性を目撃したり理解したりすることに失敗するのだが、その失敗は作者あるいは作品の失敗を意味するのではなく、作者はあえて失敗を失敗として描くことで、本当はその失敗ではないオルタナティブのほうを描いているのだ、というものだ。小説はそのオルタナティブの正体はあきらかにしないが、まさにそれゆえにモダニスト的な陰画として小説は成功しているというわけである。だがこうした読解はそもそも次のシンプルな事実を見落としている。すなわち、時系列を整理すれば、①セプティマスの死の知らせがクラリッサの意思に関係なく届けられ（それはまず彼女を苛立たせるのだ）、②つづいてクラリッサは、やはり彼女の意思と関係なくエピソードを経験し、③そして最後に彼女は自分の身を襲った経験に、つまりセプティマスの自殺に、解釈を与えるのである。クラリッサの自由意志らしきものは③にしか介在していない。もし作者の意図の次元を考慮するのなら、ウルフはたとえばクラリッサに通行人として偶然セプティマスの自殺を目撃させることもできたわけで、この実験性に満ちてはいるものの内容的にリアリズムの範疇に収まる小説においてこの目撃をあえてエピソードという魔術的な方法論で達成するという形式上の選択を、本稿はリアリズムへの挑戦であると捉えたい。そのためわれわれは、なぜウルフはここでエピソードを使ったのか、そしてその効果はどういったものか、この二点を問わなくてはならない。

耳にするたび「いつも」このような身体的追体験に襲われてきたと証言しているから、セプティマスの件はその一例にすぎないのだろう。この時点でクラリッサをセプティマスの加害者だと認定するのは難しく、彼女はむしろ自殺行為を強制的に追体験させられる被害者のひとりでさえある。

自分は「彼に似ている」と感じて見知らぬ青年の自殺を祝福するまえに、クラリッサはブラドショーとセプティマスが会っていた可能性に思いを巡らす。そんなことを考えるのはブラドショーがシェル・ショックに苦しむ帰還兵を診断していることを知っているからであり、彼女はパーティに出席しているこの医師のパーソナリティには「邪悪なところがあり」、「名状しがたい非道に手を染められる」人間なのだと同じくも察知している。エピソードのショックも醒めやらぬなか、彼女は推測をつづける——「もしこの青年がサー・ウィリアムのもとを訪れ、彼がいつものように力で威圧したとすれば、青年はこんなことを言ったんじゃないだろうか（じっさいいまそれを感じる）、人生は耐え難い、奴らが人生を耐え難くする、ああいう人間が」。セプティマスとともに、彼女はいまブラドショーたちが体現するメデイコポリティカルな暴力というものを垣間見ているのだ。つづく「これが私の罰なんだ、こつちで男がひとり、あつちで女がひとり沈み、消えてゆくのをこの深い暗闇のなかで見るのが、ドレスを着たまま目撃することを強いられているんだ」という謎めいたパッセージは、クラリッサとセプティマスがサバイバー・ギルトを共有していることをふたたび思い起こさせる（二八三―二八五）。この「沈み、消

「シェル・ショックの後遺症」と「法案」が言及された直後にクラリッサは「ある青年」が自殺したという知らせを受けとる。彼女は総理大臣がたつたいま入っていたはずの小さい部屋へと移動するが、そこには誰もおらず、ひとりになった彼女の「自殺したんだ——でもどうやって？」という自問が、エピソードの引き金となる——

自殺したんだ——でもどうやって？ いつも身体がまずそれを体験する、なにか、いきなり、事故の話を聞くと。服が燃え、身体が焼ける。窓から身を投げたのだ。地面が突如として迫ってくる。彼の身体を貫く、ぎこちなく、傷つく、錆びた鉄柵が。横たわってずん、ずん、ずんと脳が鳴る、そして暗闇に飲み込まれる。それが見えた。でもどうしてそんなことを？（二八四）

ここでクラリッサが体験しているものは、傍観者として自殺を目撃する以上に直接的であり、死の間際のセプティマスの知覚の追体験というべきものだ。このような「事故」を追体験させられることは誰でも極度にショックンガなはずであり、ましてや妹の事故死を目の当たりにした過去を持ち「ヒステリー」を患う女性にとつてはなおさらである。セプティマスの自殺は彼女が言うように「事故」ではないわけだが、だからこそ、このクラリッサの語彙選択は彼女がセプティマスと事故で死んだシルヴィアの運命を重ねていることを示唆している。クラリッサは「事故」の話を

えて「ゆく「男」と「女」がまずはセプティマスとシルヴィアであり、さらにはテクストにあらわれない多くの死者がそこに含まれることがわかるだろう。トラウマ読解は最終的に（死ではなく）生を選択するというクラリッサの決断をとりあげてこれを彼女の「コミュニケーション」の拒否であると解釈してきたが、クラリッサは自身がひとびとの死を「目撃」し、そのうえでセプティマスと同様のサバイバー・ギルトを抱えながら生きながらえることを「強いられて」いるのだと理解している。この目撃のあとになつてはじめて彼女は自分が「彼に似ている」と考えるのだ。彼女はパーティを開くことを「招集 (assemble)」する行為だと考えているが、クラリッサはまさしく記録されざる他者の被害性を掬いあげる記憶のアーカイヴィストなのである。

クラリッサはセプティマスにたいして暴力的にふるまうのだという読解の批判が重要なのは、それがいま読んできた場面における枢要な含意を見落としているためである。この小説はきわめて実験的なモダニズムの作品だが、それでもエピソードの場面は読者を戸惑わせる。マルカム・ブラドベリーとジェイムズ・マクファーレンによる古典的な定義を借りれば、モダニズムとは「期待される連続性の侵害」⁴⁵であるという⁴⁶。この場面で生じている侵害行為とはなにか？ クラリッサとセプティマスが出逢わないというテクスチュアルな事実が社会的な隔離政策の反映であると論じたが、なぜこの法はこのような仕方では破られるのか？ 本稿はつぎのように答えたい——ウルフはエピソードをリアリティリアリズムへのあからさまな違反行為として描き、小説

